



JICA ボランティアのハナシ

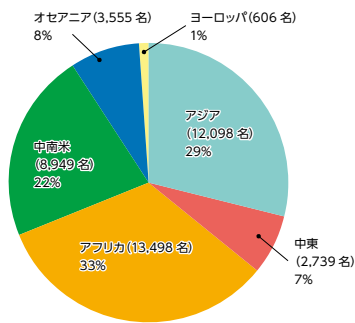
～青年海外協力隊・シニアボランティア～

今回は、JICA でボランティア活動をされた3名の方々にお話を伺いました。

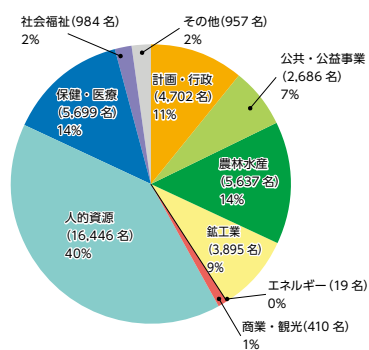
※JICA ボランティアとは…

お互いの価値観、生活様式・文化を尊重し、直接ふれあい、交流しながら、貧困問題、環境問題などその国の抱える問題に取り組み、経済や社会の発展に貢献することを目的としたボランティア。

青年海外協力隊の派遣国（累計）



青年海外協力隊 職種別派遣実績（累計）



「提供 国際協力機構（JICA）」 / 「出典 国際協力機構（JICA）」 2016年3月31日現在



桐山 武士さん

理科・数学教師としてマラウイへ派遣、現在は一般企業で勤務（現職参加：会社の休職制度を利用して参加）

青年海外協力隊へ応募したきっかけは？

学生のころから海外に興味があり、就職して2年ほどたってから、これからどうしていきたくかを考えた時、海外に出てみたいと思いました。海外でなにかできないかと探している中で青年海外協力隊にたどり着きました。途上国へ行きたかったのは、途上国の人たちはどんな生活をしているのかを知りたかったからです。日本で生活していると必要なものはすぐ手に入るし、サービスも整っています。一方、途上国では快適とはいえない環境の中で現地の人は何を感じ、どのようにして生活しているのかに関心をもったからです。

現地ではどんな活動をしていましたか？

日本でいう中学校と高等学校で、物理と化学を教えていました。マラウイは、小学校が義務教育で中高からは小学校の成績によって学校が決められるシステムになっています。さらに、中高等学校の卒業資格を得るには、国家試験に合格しなければなりません。そのため、試験の答えさえ分かれば良い、テストに合格できればいい、という思考が強くカンニングも多々みかけましたし、計算過程がなく答えだけが書かれた解答用紙を目にすることもよくありました。良い点数を取りたいという気持ちも分かりますが、日本の教育を受けている自分たちからすると、重要なことは点数をとることではない、と思いました。また、生徒は教科書も持っておらず、教材も十分でない状況でいかに指導していくか悩みました。そんな、マラウイの状況に教育システムの限界を感じました。さまざまな制約の中で、授業では追いつけない範囲は教科書のコピーを掲示板に貼り、生徒に学んでもらえるよう工夫したところ、いつの間にか現地の周りの先生も同じように生徒たちのために工夫するようになっていました。

活動を通じて感じたことは、日本がいかに恵まれているか、ということでした。現地では生きることに精一杯で収穫前の食料がない時期には食物の取り合いで暴動が起きたり、都会では強盗や空き巣が起きることも多々あります。そのような状況を目の当たりにしていくうちに、日本で当たり前だと思っていた出来事が素晴らしいことなのだと思うようになりました。（マラウイに）行く前とは違った見方で日本を見ることができるようになりましたね。

今後はどんなことをしていきたいですか？

日本はムラ社会で、閉ざされた環境であると感じることがあります。従来のやり方を残しながらも海外のやり方や新しいアイデアを取り入れていくことも必要だと思います。そういう風にしていかないと日本企業は海外企業との競争に勝ち残れないのではないのでしょうか。特に、日本で働いている人も海外にでて視野を広げてみて欲しいです。企業で働く者の1人として、海外で生活した経験を活かして、企業の海外進出のサポートやこれから海外で生活しようとする人のお手伝いをできればと考えています。チャンスがあれば、自身も再び海外で働いてみたいです。



伊原 真央さん

公立学校の教師としてボリビアに派遣され、現地の教育関係者に教育指導を実施。現在は小学校教師。

青年海外協力隊へ応募したきっかけは？

子どもの頃にアメリカに住んでいた経験が原点です。アメリカへ行く前は、言葉も分からず困るだろうと思っていましたが、現地にいる周りの人たちにとっても助けられました。そこでもらった感謝を返したい、そんな思いで学生のころからボランティアをしていました。日本で短大を卒業してそのまま教員になりましたが、自分自身の人生経験が浅く、自分は子どもたちになにを語れるのか、と考えるようになりました。途上国で起こっている問題に直面し、ネット上や教科書に載っている事だけではなく、実際に自分で確かめたい、そして子どもたちに伝えられるようになりたいと思い青年海外協力隊を志望しました。

現地ではどんな活動をしていましたか？

ボリビアの公立学校で日本式の教育スタイルの導入、教員の授業力を向上させるため派遣されました。マラウイと同じようにボリビアの学校でも暗記中心の授業スタイルが確立されていました。暗記では答えをだすまでのプロセスについて考えることがないため考える力がつかない、先を見通して考える力をつけられないため、そこを改善していきたいという視点をもつ現地の校長先生と、工夫しながら教育スタイルを確立していけるよう努めました。

教育はお金をかけても成果がすぐにはみえにくいいため特に途上国では教育にはお金をかけられないという現状がありました。校長先生は「この国の人たちは先を見通して考える力が乏しいため、未来を担っていく子どもたちのために投資をしようと考えることができないんだよ」と話されていたことが記憶に残っています。教育システムを整えば人も育ち、国も成長していく、ということに気がつき、実現していくには時間がかかり、難しいことだなあ・と痛感しました。

今後はどんなことをしていきたいですか？

お金のためだけでなく、目の前の子どもたちを育てていくということに熱心になる先生たちに出会い、無償の愛を感じました。また日本では社会や人の目を気にしてしまうことがあると思いますが、そのような考えはあまりなく、純粋さをもち心にゆとりがある人が多かったです。そんな姿を見て、私も相手を尊敬する気持ちを大切に目の前のことに一生懸命取り組んでいきたいと思います。現在は教育の現場で働いているので、自分の経験を子どもたちにも話していきたいです！



安田 典夫さん

農業技術センターで培った技術を活かし土壌肥料、コンポストづくり指導のためネパールへ派遣

シニアボランティアへ応募したきっかけは？

現職時代に、アフリカやネパール、フィリピン、タイなどさまざまな国の人々が研修生として日本へ来ていました。そこで研修生に指導していた経験があり退職後なにをしようかと考えていた時、JICAのシニアボランティアで「土壌肥料」での募集があり、1年早期退職をしてボランティアに参加しました。

現地ではどんな活動をしていましたか？

ネパールの農業発展・農民の所得向上に貢献するため、派遣されました。農業を発展させるためには土の質が良くなければなりません。そこで土

の性質を変えるため、土壌分析の指導やコンポストづくりをおこなっていました。私の英語が通じるのか不安もありましたが事前研修もあったので、現地でも日々のコミュニケーションをとることができました。現地の方にネパール語も教えてもらい、仕事では英語、日常ではネパール語を使い、最初の何カ月かは頭が痛かったです。そんな中でも余暇には山登りを楽しむことができ、小さいことは忘れてしまうほど、ネパールの山々から見る景色はすばらしかったです。

活動を通じて感じたことはどんなことですか？

現地で何もかも1人でしていけないといけないので、強くなれると思います。私が活動していたネパールにも多数の青年海外協力隊があり、2年間ですがどんどん遅くなっていく様子を見ておりました。日本と比べると途上国での生活は不自由ですし、辛いことの方が多いですが、会社員でも公務員でもこの経験は生きてくることが多いのではないのでしょうか。今後は自分の活動を若い人へも話していきたいですね。